

2.6 未来を創造する研究資源の補完



九州大学大学院経済学研究院
教授

永田 晃也

一般財団法人 新技術振興渡辺記念会が創立35周年を迎えられるに当たり、これまで貴財団の維持・運営に尽力された方々への心からなる敬意を込めてお祝いを申し上げます。

私事に亘りますが、小職は1986年から1992年まで財団法人 未来工学研究所にて主として科学技術庁からの受託研究に従事、1992年から1998年まで科学技術庁科学技術政策研究所（現、文部科学省科学技術・学術政策研究所）にて政府研究開発投資の経済効果予測モデルの開発などに従事した後、北陸先端科学技術大学院大学および九州大学にてイノベーションと知識マネジメントに関する教育・研究に従事してまいりました。

小職のように科学技術政策と技術経営の領域で研究経歴を積み重ねてきた者にとって、貴財団が推進された調査研究は常に有用な指針を提供してくれるものでした。調査研究課題の具体例を振り返ってみるならば、1983年に実施された「研究開発投資モデル開発に関する調査研究」（代表:宮川公男教授）や、1987年に実施された「科学技術連関表の開発に関する調査研究」（代表:茅陽一教授）は、後に小職が科学技術政策研究所で取り組んだモデル開発にとって、非常に重要な先行研究であったことなどが挙げられます。これらの他にも、貴財団が推進された調査研究課題の成果には、現在、文部科学省が推進している「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』」（SciREX）の課題を先取りした事例が少なくありません。

一方、貴財団の助成事業は、科学技術政策研究という学際的な新領域の研究者にとっては時として基盤的な研究資金を補完する役割を担ってくれるも

のでした。小職は九州大学に就任後、一時、交流人事により古巣の科学技術政策研究所で総括主任研究官の任に就く機会を得て、「世界トップレベル研究拠点プログラム」(WPI)の制度設計に資する調査研究を担当しましたが、そこでの分析結果を研究開発システムにフォーカスする視点で深耕する必要性を感じていた恰好の時期に、貴財団の助成をいただくことができました。また、近年ではSciREXの基盤的研究・人材育成拠点事業に採択されたことを受けて九州大学に設置され、小職がセンター長の任にある科学技術イノベーション政策教育研究センターの若手研究者が、萌芽的な研究課題に取り組む際に貴財団の助成をいただいております。

周知のように我が国の研究者が取得できる主要な競争的研究資金には科学研究費補助金がありますが、その審査が依拠しているピアレビュー方式については、既に実績が上がっている研究課題が採択され易い、レトロスペクティブな偏向を持つことが課題として指摘されています。この点で、政策ニーズへの機動的な対応を特徴とする貴財団の一連の事業は、科研費のような研究資金を補完する役割を果たしてこられたと思います。

我が国では、まだ研究費の負担源としての浄財の役割は極めて限定的ですが、英国では政府の研究費負担が緊縮される局面において、ウェルカム・トラストのような財団の存在が基礎的な研究を支える上で重要な役割を果たしてきたことが知られています。厳しい財政状況の下でイノベーションの創出を喫緊の課題としている我が国でも、今後、研究資金を補完する財団の存在は重要性を増していくと思われれます。貴財団の益々の発展が、イノベーションによる未来の創造を志向する研究者の成長とともにあらんことを祈念して、祝辞とさせていただきます。